

ジストニアなどに対する治療法の選択肢が拡大 ～機械を埋め込まない「脳深部凝固療法」の選択肢が広がりました～

<報道概要>

パーキンソン病（注1）やジストニア（注2）、振戦（ふるえ）、書痙（注3）に対する治療法として、機能的脳神経外科手術があります。徳島大学病院脳神経外科では、これまでパーキンソン病やジストニアに対して、主に脳深部刺激療法（DBS：Deep Brain Stimulation）（注4）による治療を行ってきました。また、振戦や書痙に対しては、脳深部凝固療法（注5）による治療を行ってきました。

近年、脳深部凝固療法が見直されてきており、振戦や書痙だけでなく、ジストニアに対しても治療効果が期待できることが分かってきました。DBSでは脳へ電気刺激を与えるための電気刺激装置を埋め込む必要がありますが、脳深部凝固療法ではその必要がありません。体内に機器を埋め込まない治療法として、当院でも提供しています。

<用語解説>

注1) パーキンソン病

脳内のドーパミンという神経伝達物質が減少することで、振戦（ふるえ）、動作緩慢（動きが小さく・鈍くなる）、筋固縮（筋肉がこわばる）、姿勢保持障害（バランスがとりにくくなり、転びやすくなる）などの運動症状が現れる疾患。

注2) ジストニア

一定のパターンで筋肉が収縮し、こわばったり、ねじれたりすることにより、思いどおりに体を動かすことが難しくなる疾患。

注3) 書痙

字を書こうとするときや字を書いている途中に、前腕の緊張が強くなり、手が震えたり、前腕に痛みが生じたりすることで、字を書くことが困難になる書字障害のこと。局所性ジストニアの一種。

注4) 脳深部刺激療法（DBS：Deep Brain Stimulation）

脳の深部にある特定の領域（核といわれる部位）に刺激電極を留置し、前胸部などに埋め込んだ刺激装置から電気パルスを送り、脳の活動を調整することで、不随意運動症（パーキンソン病・本態性振戦・ジストニア）を治療する方法。

注5) 脳深部凝固療法

脳の深部に電極を挿入し、電極から発生させた熱によって、標的とする脳の組織を熱凝固する方法。

お問い合わせ先

徳島大学病院脳神経外科

担当者 外来医長／特任助教 三宅 一央

電話番号 088-633-7149

メールアドレス med.miyake[アット]gmail.com

※メールを送信される場合には、[アット]を@に置き換えてください。